

探訪 北の風景 44

トロッコと羊をめぐる冒険 上川管内美深町仁宇布

青木和弘

仁宇布（にうぶ）は牧畜などで28世帯、58人が暮らす過疎の集落である。豊かな自然に囲まれ、晴れた夜には満天の星空を見ることができ、雪の訪れが早く雪解けは遅い。美深町の人口は本年10月末で4489人。コメ栽培の北限とされるこの町は、1970年当時、1万人を超えていたが、コメの減反政策による離農や林業の衰退、「日本一の赤字ローカル線」と騒がれた美幸線の廃止などもあって人口が半減した。

そんな中、「NPO法人トロッコ王国美深」が1998年、町が所有する旧美幸線の線路に、保

線作業で使っていた動力付きトロッコを走らせた。新緑の初夏から黄葉の秋まで、白樺（しらば）の樹林や橋梁を駆け抜ける往復10キロ、1時間の旅だ。改良型トロッコの最高時速は20キロ程度だが、橋梁では清流を下に眺め、線路の継ぎ目のガタンゴトンという響きもあって、スリルとスピード感がいっぱいだ。普通免許があれば自分で運転ができるし、なければ係員が運転するので大人も子どもも楽しめる。ゴールデンウィークから10月末ごろまでの営業で、今年は1万1926人が乗車した。

美幸線が廃止になったのは1985年。当時、廃止反対運動の先頭に立った、故・長谷部秀見美深町長は、「絶たれた全線開通の夢」と題して「写真集国鉄北海道ローカル線」（1987年、北海道新聞社刊）に寄稿、「法の権力によってことを運んでしまおうとする強引なやりかたは、地方虐待のような施策におもえた」と無念の真情を吐露している。

美幸線は、宗谷本線の美深駅から仁宇布駅までの21・2キロメートル。仁宇布から当時の歌登町を通ってオホーツク海の枝幸駅を結ぶ57・5キロメートルの工事が進んで、トンネル14カ所や鉄橋38カ所、道床も完成して線路や枕木などが運び込まれていた。線路さえ敷けば枝幸駅までの開業だっ



深旧美幸線の線路はそのまま残っている。トロッコはここコタンコルカムイ駅（旧仁宇布駅）から片道5キロを往復する。最高速度は20キロほどだが、スピード感がある。清流をまたぐ橋梁もあり、緑に包まれて走る気分は爽快（そうかい）だ

たのに、突然、工事は中断。延長工事部分も含めて廃線になってしまった。当時、終点だった仁宇布駅舎は解体撤去されたが、トロッコ王国の誕生で、枕木を組み上げて造った「コタンコルカムイ駅」ができた。コタンコルカムイはアイヌ語で「マフクロウのこと。「里を守る神」という意味があるという。かつて美幸線に託した地域住民の思いが深く込められているような気がする。

もう一つ、世界の目が、仁宇布に注目し始めた。ノーベル文学賞候補とされる、村上春樹の3作目の長編小説「羊をめぐる冒険」（1982年）の舞台という評判が広がり、村上春樹ファンの聖地になっているのだ。

羊を育てる松山農場が経営する民宿「ファームイン・トント」には、国内はもちろん、台湾や香港、カナダ、ロシアなどからも春樹ファンが訪れ





旧仁宇布駅の駅舎は撤去されたが、線路やホームは当時のまま残っている。写真の右奥が新しいコタンコルカムイ駅



牧草地の中、白樺に囲まれて建つファームイン・トント。日本各地や海外からも村上春樹ファンが訪れる聖地になっている。この前庭で、春樹の読書会が行われている。星の斑紋のある羊は見つけられるのだろうか

ている。6月にトントの前庭で開かれている春樹作品の読書会は、今年で6回目になり、秋のノーベル文学賞の発表にもファンが集うようになった。小説で、主人公が星の斑紋を持つ羊を捜したのは仁宇布だったのだろうか。広大なソバ畑と牧草地の中で、トントは白樺に囲まれて建っている。そんな風景を眺めながら、小説の世界を反芻（はんすう）するのも楽しいものだ。

仁宇布からは松山湿原が近いし、近隣には川釣りに適した河川も多い。美深町観光協会では、平成の名水百選（環境省認定）に選ばれた「仁宇布の冷水」と「十六滝」めぐりも推奨している。観光化されていないところばかりだが、それが仁宇布の魅力ともいえる。いかにも、村上春樹ファン好みという失礼だろうか。